研究報告

乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴
―夫婦それぞれの評価に着目して

Characteristics of family functioning in dual-income couples rearing children: Focus on the result of self-evaluation of individual

梅田　弘子[1)2)]，島谷　智彦[1)]，長沼　貴美[3)]

Hiroko Umeda[1)2)], Tomohiko Shimatani[1)], Takami Naganuma[3)]

要　旨

近年増加している，乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴を明らかにし，家族看護介入への示唆を得ることを目的に，保育園に通う乳幼児を育児中の共働き夫婦を対象に質問紙調査を実施した。274組548名の夫婦ペアデータを分析対象とした．調査内容は基本属性と家族機能調査（FFFS日本語版I）である．結果，家族機能の評価は，妻が夫よりも家族機能の重要性を高く認識し，家族機能充足度が低かった．妻に対する看護介入の必要性が高く，時間的余裕と夫からの家事・育児への協力が得られるように支援する必要性が示唆された．

キーワード：共働き家庭，FFFS家族機能調査日本語版Ⅰ，家族機能，育児

Key words: dual-income families, FFFS Japanese Version 1, family functioning, child-rearing

1）広島国際大学看護学部（Faculty of Nursing, Hiroshima International University）
2）広島国際大学大学院看護学研究科博士後期課程（Doctoral program in Nursing, Hiroshima International University）
3）創価大学看護学部（Faculty of Nursing, Soka University）

Ⅰ．はじめに

我が国は1980年代以降，現在に至るまで，未婚化・非婚化，晩婚化・晩産化による，少子高齢化が急激に進んでいる．この人口構造の変化が既存の社会経済システムに及ぼす影響は大きく，少子高齢社会における労働力の確保の必要性や男女共同参画の観点から，2016年4月1日には「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律（女性活躍推進法）」が施行された．それに伴い，養育期の家族は，これまでの性別役割分業による育児から，夫婦協働で行う育児への転換を求められるに至った．1997年以降，共働き世帯数は男性雇用者と無業の妻から成る世帯数を上回り，2014年には片働き世帯数の約1.5倍となって，現在も増加の一途を辿っている（内閣府，2015）．このような時代の要請により，乳幼児を育てる共働き家庭は，家事・育児と仕事の両立を目指して日々奮闘している．乳幼児を養育する時期の家族は，子どもの誕生という新しい家族構成員を迎え，構成員それぞれが新しい役割を担い家族を再スタートさせる変化の時期といえる．養育期の家族機能については，「家族間のコミュニケーション」が中心的な役割を果たしている（中村，2003）ことや，家族機能と育児不安との間には相関があり，中でも配偶者との相互関係が育児の充実感，満足感，疲労感と高い関連が認められる（神庭ら，2005）ことが報告されている．共働き夫婦の育児の協同においては配偶者からの育児に関する相談や調整の期待を感じ取ることが協同育児に繋がることが確認されている（青木，2009）．これらからは，養育期の家族が夫婦間で育児について話し合い，良好な関係性のなかで，互いに相談や調整を行い，共通理解のもとで育児を行うことができれば，その家族自らが家族機能を維持・向上させ，そこで育つ子どもの成長・発達を促進することにつながることが示唆されている．このことから，共働き家庭への看護支援は，親のみならずそこで育つ子どもの健やかな成長発達にも繋がる点で重要である．家族看護学は，「家族システムユニットが家族機能を自立的かつ自律的に維持・向上するために，予防的ならびに療法的な家族支援を行う実践科学」（法橋，2008a）であり，これまで数多くの家族機能測定ツールが開発されてきた．なかでも家族看護学で頻用されている尺度の一つに，Feethamらが開発したFeetham家族機能調査（FFFS: Feetham Family Functioning Survey）（Roberts et al, 1982）がある．FFFS以外の尺度が家族の対内的機能を測定しているものが多い中で，FFFSは家族の対内的機能のみならず対外的機能をも含めて測定可能な尺度である．法橋ら（2008a）によってFFFS日本語版Ⅰが開発されており，信頼性・妥当性も検証されているが，調査内容の厳密性による質問項目の多さもあってか，専業主婦が約8割を占める母集団の報告はあるものの，近年の共働き家庭を対象にペアデータを用いて家族機能を測定した研究は僅かであった．

そこで，本研究は，近年急速に増加している，乳幼児を育てている共働き家庭の家族機能の特徴を明らかにし，家族看護介入への示唆を得ることを目的とした．

なお，法橋ら（2008b，2011，2015）はこれまで国内外においてFFFS日本語版Ⅰを用いて養育期の家族機能研究を蓄積している．これらの研究結果との比較が可能であること，今回，乳幼児を育てている共働き家庭の家族機能の特徴を明らかにするにあたり，対象が共働きの夫婦であることから，夫以外の身内や友人・知人との関係や保育所や仕事などを含めた，家族を取り巻く社会環境の影響までを守備範囲とする家族機能測定尺度を選択する必要があった

こと，開発時の対象集団の特性が類似しており より適正に集団の特性を把握できる可能性があるという理由から，FFFS 日本語版 I を用いることとした．

Ⅱ 研究方法

1．研究デザイン：自記式質問紙調査法による量的研究．

2．研究対象者:A 県の B 市, C 市の保育園（56 カ所）に通う乳幼児を育てている共働きの夫婦．

3．調査方法：無記名自記式質問紙法を採用した．B 市，C 市の保育行政担当部署に研究計画を説明し，協力保育園の紹介を得た．各保育園の園長に研究計画を説明し了承を得て，保育士を通じて園児の両親への調査票の配布を世帯単位で依頼した．一世帯に一つの封筒を用意し，その中に研究協力依頼文章および父親用・母親用の調査票各一部と返信用の封筒 2 部を封入した．調査対象者の夫婦ペアを特定するために，あらかじめ父親用・母親用の調査票 1 枚目の右下に夫婦同一のナンバリングを付記しておいた．調査票の回答は夫婦で相談せず，夫婦個別に研究者あての返信用封筒に厳封し郵便で返送するよう依頼した．

4．調査期間：2015 年 11 月 5 日～ 2015 年 12 月 31 日．

5．調査内容

1）基本属性：年齢，年収，職業，子どもの数および年齢，労働状況，夫婦以外からの育児支援．

2）家族機能：家族機能の測定には FFFS 日本語版 I を用いた．FFFS は，システム理論から派生した家族エコロジカルモデルに基づいて，「家族と家族員との関係」「家族とサブシステムとの関係」「家族と社会との関係」の 3 分野から構成されている．Feetham らによって開発された FFFS を法橋ら（2000）が翻訳し，FFFS 日本語版 I（法橋，2009）として開発したものを用いた．この尺度は，家族と家族員との関係にとどまらず広範囲な 3 分野を網羅し，社会病理現象をも取り扱う家族看護学の研究に適している（法橋，2008a）．27 項目で構成され，25 項目が回答選択肢型質問，2 項目が自由回答型質問である．回答選択肢型質問は「家族と家族員との関係（10 項目）」「家族とサブシステムとの関係（8 項目）」「家族と社会との関係（6 項目）」の 3 分野で構成されている．各項目について「a. 現在どの程度ありますか」「b. どの程度であると望ましいですか」「c. あなたにとってどの程度重要ですか」という質問に対してリッカートスケール（ほとんどない（1 点）～たくさん（7 点）の 7 段階）で回答を求め，1 ～ 7 点で得点化を行う．現実の家族機能の認知（a 得点）と理想の家族機能の認知（b 得点）の差の絶対値を算出し，これを家族機能充足度得点（d 得点）として取り扱う．この d 得点が 0 から離れるほど，理想と現実のディスクレパシーが大きいことを示し，家族機能が十分に機能していないことを意味する．c 得点は家族機能重要度得点であり，高いほどその家族機能に価値を置いていることを意味する．よって d 得点による家族機能充足度が低く，かつ c 得点において高い価値を示している項目は家族看護介入の優先度が高いことを意味している（法橋，2008a）．本報告では，25 項目の回答選択肢型質問を分析の対象とした．

6．分析方法：回答者の属性は，記述統計量の算出を行った．FFFS 日本語版 I の得点について総得点，分野別，項目別の得点を算出した．FFFS 日本語版 I の使用上の留意点として，夫婦間の家族機能充足度得点には有意な相関が認められず，乖離することがあるため，夫婦間で家族機能の評価に違いがあることを念頭に置いて分析する必要性がある．よって，夫婦別の

得点を算出し，夫が捉えた家族機能，妻が捉えた家族機能，などと区別をして，その特徴を明らかにした．ペアデータを用いたため，夫婦別の得点比較は paired-t test を行った．有意確率は 5% とし，分析は IBM SPSS Statistics22 for Windows を用いた．

7．倫理的配慮

研究対象者に対して，研究目的，方法，非協力による不利益は一切ないこと，データ管理方法，研究結果の公表方法，調査票の個別返送をもって研究協力への同意を得る旨を説明した．調査対象者の夫婦ペアを特定するために，父親用・母親用の調査票 1 枚目の右下に夫婦同一のナンバリングを付記したものを配布したが，これは個人を特定するものではなく夫婦を一致させるための番号である旨を依頼文章に記載し説明した．調査について保育園からの強制力が働かないように，研究は保育園とは関係のない別組織の研究者による研究であること，調査は無記名で行い，研究者以外の者が調査票を閲覧することはないこと，拒否による保育上の不利益は一切生じないことを依頼文に明記し説明した．育児に対する考え方や家庭における育児状況等の個人的な情報を収集するため，協力は自由意思であることを強調した．FFFS 日本語版 I の使用については，開発・著作権者より使用許諾を得て調査票の提供を受けた．「広島国際大学人を対象とする医学系研究倫理委員会」による審査を受け，広島国際大学長の承認を得て実施した（倫理審査承認番号：倫 15-072）．

Ⅲ　結果

保育園に通園中の子どもをもつ夫婦 1081 組 2162 名に調査票を配布し，668 部（回収率 30.9%）が回収された．そのうち夫婦ペアで回答に不備のない 274 組 548 部（回収率 25.3%）を分析の対象とした．

1．対象者の属性

対象者の属性を表 1 に示した．平均年齢は，夫が 36.9 ± 5.7 歳，妻が 35.5 ± 5.0 歳であった．夫は正規雇用が 271 名（98.9%），妻は正規雇用が 156 名（56.9%）であった．子どもの数は平均 2.05 ± 0.86 名で，約 9 割が核家族であった．

2．FFFS 日本語版 I の得点結果

家族機能充足度得点（d 得点）および家族機能重要度得点（c 得点）それぞれについて，夫婦別の総得点，分野別平均得点，25 項目全項目の各項目得点を表 2 に示した．夫婦間の得点の差は paired t-test を行い，t 値および p 値を求めた．

表 1．対象者の属性

n=548　274世帯

平均年齢	夫	36.9±5.7歳
	妻	35.5±5.0歳
収入	夫	200万円未満:7(2.6%)　200～500万円未満:185(67.5%)　500万円以上:82(29.9%)
	妻	200万円未満:148(54.0%)　200～500万円未満:108(39.5%)　500万円以上:18(6.5%)
労働状況	夫	正規271(98.9%)　非正規3(1.1%)
	妻	正規156(56.9%)　非正規118(43.1%)
労働時間	夫	週あたり日数:5.35±0.58日　1日平均労働時間数:9.18±1.78時間
	妻	週あたり日数:5.04±0.67日　1日平均労働時間数:7.09±1.70時間
子どもの数(世帯あたり)		1人:71(25.9%)　2人:135(49.3%)　3人:56(20.4%)　4人以上:12(4.4%)
通園中の子の数(世帯あたり)		1人:190(69.3%)　2人:77(28.1%)　3人:7(2.6%)
通園中の子の年齢		0歳:3(0.8%)　1歳:39(10.6%)　2歳:53(14.5%)　3歳以上:269(74.1%)
家族形態(世帯数)		核家族:246(89.8%)　拡大家族:28(10.2%)
育児に対する援助(世帯数)		援助あり:237 (86.5%)　援助なし:37(13.5%)
	援助あり:内訳	祖父母:208 (87.8%),祖父母とそれ以外の親族:10(4.2%),友人:3(1.3%),その他:16(6.7%)

表 2. FFFS 日本語版 I 家族機能充足度得点（d 得点）および家族機能重要度得点（c 得点）結果　ー総得点・分野別得点・項目別得点一覧ー

項目			家族機能重要度得点(c得点) 夫 (n=274) 平均 ± 標準偏差	妻 (n=274) 平均 ± 標準偏差	夫婦間有意差 t値	p値	家族機能充足度得点(d得点) 夫 (n=274) 平均 ± 標準偏差	妻 (n=274) 平均 ± 標準偏差	夫婦間有意差 t値	p値
総得点(25項目)			109.15 ± 20.76	116.49 ± 21.34	-4.512	0.000 ***	21.58 ± 14.76	25.20 ± 14.28	-3.554	0.000 ***
I 家族と家族員との関係(10項目)			5.20 ± 0.83	5.20 ± 0.90	-0.017		0.90 ± 0.78	1.06 ± 0.86	-2.552	0.011 *
II 家族とサブシステムとの関係(8項目)			3.84 ± 1.03	4.44 ± 1.00	-7.446	0.000 ***	0.80 ± 0.69	0.82 ± 0.63	-0.318	
III 自分家族と社会との関係(6項目)			3.92 ± 1.50	4.30 ± 1.50	-3.206	0.002 **	0.71 ± 0.69	1.01 ± 0.80	-5.686	0.000 ***
番号	分野	内容								
3	I	配偶者と過ごす時間	5.79 ± 1.36	5.50 ± 1.50	2.805	0.005 **	0.95 ± 1.35	1.00 ± 1.27	-0.554	ns
4	I	配偶者にあなたの関心事や心配事を相談すること	5.17 ± 1.66	5.44 ± 1.58	-2.213	0.028 *	0.70 ± 1.18	0.76 ± 1.15	-0.596	ns
6	I	余暇や娯楽の時間	4.91 ± 1.43	4.93 ± 1.48	-0.158	ns	1.31 ± 1.46	1.72 ± 1.37	-3.565	0.000 ***
7	I	家事や育児などに対する配偶者の協力	6.02 ± 1.20	5.47 ± 1.39	4.987	0.000 ***	0.64 ± 0.95	1.21 ± 1.35	-5.828	0.000 ***
12	I	子どもと過ごす時間	5.94 ± 1.27	6.27 ± 1.01	-3.497	0.001 **	1.61 ± 1.58	1.24 ± 1.39	2.930	0.004 **
14	I	配偶者との意見の対立	4.07 ± 1.91	4.13 ± 2.05	-0.341	ns	0.92 ± 1.29	0.98 ± 1.37	-0.646	ns
16	I	家事をする時間	4.07 ± 1.70	5.36 ± 1.51	-9.387	0.000 ***	1.20 ± 1.26	1.70 ± 1.51	-4.390	0.000 ***
21	I	配偶者からの精神的サポート	5.30 ± 1.56	5.51 ± 1.60	-1.838	ns	0.62 ± 1.15	0.92 ± 1.40	-2.986	0.003 **
24	I	結婚生活に対する満足感	6.03 ± 1.26	5.85 ± 1.35	1.743	ns	0.56 ± 1.04	0.95 ± 1.44	-4.502	0.000 ***
25	I	性生活に対する満足感	4.74 ± 1.80	3.58 ± 1.91	8.337	0.000 ***	1.29 ± 1.72	0.83 ± 1.29	3.768	0.000 ***
1	II	友人・知人に関心事や心配事を相談すること	3.36 ± 1.74	4.50 ± 1.69	-7.633	0.000 ***	1.08 ± 1.35	0.84 ± 1.13	2.300	0.022 *
2	II	身内(配偶者は含まない)にあなたの関心事や心配事を相談すること	3.86 ± 1.82	5.07 ± 1.75	-8.398	0.000 ***	0.78 ± 1.16	0.57 ± 1.01	2.326	0.021 *
8	II	家事や育児などに対する身内の協力	4.65 ± 1.74	4.87 ± 1.88	-1.688	ns	0.68 ± 1.08	0.81 ± 1.15	-1.575	ns
9	II	医療機関にかかったり健康相談をうけること	4.44 ± 1.84	4.39 ± 1.80	0.345	ns	1.11 ± 1.47	1.11 ± 1.43	-0.064	ns
10	II	家事や育児などに対する友人・知人の協力	2.50 ± 1.67	2.31 ± 1.68	1.471	ns	0.47 ± 0.88	0.58 ± 1.02	-1.341	ns
11	II	子どもに関する心配事	5.00 ± 1.84	5.25 ± 1.82	-1.678	ns	1.05 ± 1.55	1.49 ± 1.70	-3.570	0.000 ***
19	II	友人・知人からの精神的サポート	3.05 ± 1.87	4.08 ± 1.93	-6.444	0.000 ***	0.65 ± 1.23	0.57 ± 1.08	0.818	ns
20	II	身内からの精神的サポート	3.87 ± 1.79	5.02 ± 1.74	-8.383	0.000 ***	0.58 ± 1.04	0.56 ± 1.04	0.213	ns
13	III	子どもが保育所・幼稚園・学校を休むこと	4.04 ± 2.20	4.45 ± 2.29	-2.319	0.021 *	0.51 ± 0.97	0.58 ± 0.94	-0.973	ns
15	III	体調が悪いこと	4.46 ± 2.31	4.79 ± 2.29	-1.842	ns	1.20 ± 1.58	1.43 ± 1.67	-1.781	ns
17	III	仕事(家事を含む)を休むこと	4.29 ± 2.22	4.68 ± 1.99	-2.213	0.028 *	0.63 ± 1.20	1.22 ± 1.45	-5.448	0.000 ***
18	III	配偶者が仕事(家事を含む)を休むこと	4.13 ± 2.04	4.47 ± 2.20	-1.944	ns	0.86 ± 1.23	0.78 ± 1.26	0.801	ns
22	III	日課(家事を含む)が邪魔されること	3.16 ± 1.83	4.24 ± 1.89	-7.056	0.000 ***	0.45 ± 0.95	1.49 ± 1.77	-8.993	0.000 ***
23	III	配偶者の日課(家事を含む)が邪魔されること	3.44 ± 1.96	3.18 ± 1.96	1.579	ns	0.59 ± 1.21	0.59 ± 1.20	0.075	ns
5	※	近所の人と過ごす時間	2.85 ± 1.60	3.16 ± 1.52	-2.507	0.013 *	1.14 ± 1.25	1.28 ± 1.27	-1.365	ns

*p<0.05**p<0.01 ***p<0.001 (paired t-test)　ns= not significant.

※「5近所の人と過ごす時間」はFFFS日本語版 I 開発時の I・II・III のいずれの分野にも属していない

表 3. 夫婦別の家族機能充足度得点および家族機能重要度得点上位項目

	家族機能重要度得点(c得点)	平均 ± 標準偏差	家族機能充足度得点(d得点)	平均 ± 標準偏差
夫	結婚生活に対する満足感	6.03 ± 1.26	子どもと過ごす時間	1.61 ± 1.58
	家事や育児などに対する配偶者の協力	6.02 ± 1.20	余暇や娯楽の時間	1.31 ± 1.46
	子どもと過ごす時間	5.94 ± 1.27	配偶者との性生活に対する満足感	1.29 ± 1.72
	配偶者と過ごす時間	5.79 ± 1.36	体調が悪いこと	1.20 ± 1.58
	配偶者からの精神的サポート	5.30 ± 1.56	家事をする時間	1.20 ± 1.26
	配偶者にあなたの関心事や心配事を相談すること	5.17 ± 1.66	近所の人と過ごす時間	1.14 ± 1.25
	子どもに関する心配事	5.00 ± 1.84	医療機関や健康相談をうける	1.11 ± 1.47
			友人知人への相談	1.08 ± 1.35
			子どもに関する心配事	1.05 ± 1.55
妻	子どもと過ごす時間	6.27 ± 1.01	余暇や娯楽の時間	1.72 ± 1.37
	結婚生活に対する満足感	5.85 ± 1.35	家事をする時間	1.70 ± 1.51
	配偶者からの精神的サポート	5.51 ± 1.60	子どもに関する心配事	1.49 ± 1.70
	配偶者と過ごす時間	5.50 ± 1.50	毎日決まってすることを邪魔されること	1.49 ± 1.77
	家事や育児などに対する配偶者の協力	5.47 ± 1.39	体調が悪いこと	1.43 ± 1.67
	配偶者にあなたの関心事や心配事を相談すること	5.44 ± 1.58	近所の人と過ごす時間	1.28 ± 1.27
	家事をする時間	5.36 ± 1.51	子どもと過ごす時間	1.24 ± 1.39
	子どもに関する心配事	5.25 ± 1.82	仕事を休むこと	1.22 ± 1.45
	身内(配偶者は含まない)に関心事や心配事を相談すること	5.07 ± 1.75	家事や育児などに対する配偶者の協力	1.21 ± 1.35
	身内からの精神的サポート	5.02 ± 1.74	医療機関や健康相談をうける	1.11 ± 1.43
			配偶者と過ごす時間	1.00 ± 1.27

※家族機能重要度得点は5点以上の項目，家族機能充足度得点は1点以上の項目を列挙．網掛けは重要度と充足度の両方に挙げられていた項目．

1）夫婦別の家族機能充足度得点（d 得点）の結果

総得点と「家族と家族員との関係」「家族と社会との関係」において，妻の得点が夫に比べて有意に高く充足度が低かった（それぞれ $p<0.001$，$p<0.01$，$p<0.001$）．25 項目中 12 項目で夫婦間に有意差が認められた．妻の充足度が低かった項目は，低い順に「余暇や娯楽の時間」「家事をする時間」「子どもに関する心配事」「日課が邪魔されること」「仕事を休むこと」「家事や育児などに対する配偶者の協力」「結婚生活に対する満足感」「配偶者からの精神的サポート」の 8 項目であった．また，夫の充足度が低かった項目は，低い順に「子どもと過ごす時間」「性生活に対する満足感」「友人・知人に関心事や心配事を相談すること」「身内に関心事や心配事を相談すること」の順であった．

2）夫婦別の家族機能重要度得点（c 得点）の結果

総得点と「家族とサブシステムとの関係」「家族と社会との関係」において，妻の得点が夫に比べて有意に高かった（それぞれ $p<0.001$，$p<0.001$，$p<0.01$）．25 項目中 14 項目で夫婦間に有意差が認められた．妻が重要性を高く認識していた項目は，高い順に「子どもと過ごす時間」「配偶者に関心事や心配事を相談すること」「家事をする時間」「身内に関心事や心配事を相談すること」「身内からの精神的サポート」「仕事を休むこと」「友人・知人に関心事や心配事を相談すること」「子どもが保育所・幼稚園・学校を休むこと」「日課が邪魔されること」「友人・知人からの精神的サポート」「近所の人と過ごす時間」の 11 項目であった．夫が重要性を高く認識していた項目は，高い順に，「家事や育児などに対する配偶者の協力」「配偶者と過ごす時間」「性生活に対する満足感」の 3 項目であった．

3）夫婦別の家族機能充足度得点および家族機能重要度得点の上位項目

d 得点による家族機能充足度が低くかつ c 得点において高い価値を示している項目は，家族看護介入の優先度が高い．そこで，家族看護介入の必要性を判断するために家族機能重要度得点は 5.00 点以上，家族機能充足度得点は 1.00 点以上の基準で夫婦別で項目を抽出した．抽出結果を表 3 に示した．抽出された項目数は，重要度項目は夫よりも妻が 3 項目，充足度項目は 2 項目多かった．夫婦に共通して，充足度が低

くかつ重要度が高い項目は，「子どもと過ごす時間」「子どもに関する心配事」の2項目であった．妻は上記2項目以外に，「家事をする時間」「家事や育児などに対する配偶者の協力」「配偶者と過ごす時間」の3項目も該当していた．夫は，「家事をする時間」については，充足度は低いが重要度は高くなかった．「家事や育児などに対する配偶者の協力」は，重要度が25項目中2番目と高いが，充足度が低いとは評価していなかった．夫婦ともに，重要度得点，充足度得点の両方が低い項目は，「家事や育児などに対する友人・知人の協力」であった．

Ⅳ 考察

1．夫婦間の比較から捉えた，夫婦それぞれの家族機能評価の特徴

本研究の結果から，乳幼児を育てている共働き家庭の家族機能の評価は夫婦間で差があり，妻の方が家族機能の重要性を高く認識し，充足度を低く評価していると捉えられた．家族機能充足度は，総得点が妻の方が有意に低く，3分野のうちの「家族と家族員との関係」「家族と社会との関係」の2分野で妻は有意に充足度が低かった．この結果は，子育て世帯の夫婦（妻の就業率約70%）を対象とした先行研究（Honda et al，2015）と同様の結果を示した．妻は，「家族と家族員との関係」では，10項目中5項目で夫よりも充足度が低く，「家族と社会との関係」については，6項目中2項目で充足度が低かった．このことから妻は3分野の中でも特に「家族と家族員との関係」において充足度が低い傾向にあった．総務省が5年に一度実施する「社会生活基本調査」（総務省，2012）によれば，家事時間は夫が増加傾向で妻は減少傾向，一方で育児時間は夫と妻共に増加傾向にあるものの，共働き世帯の家事育児時間は，1日平均，夫が39分，妻が4時間53分であり，妻が圧倒的に長い．妻は仕事をしながら多くの家事・育児を担い厳しい状況に置かれている．そのことが夫婦間の充足度の差となって表れたものと推察される．興味深いのは，「家族と家族員との関係」において分野全体の重要度は夫婦でほぼ同じ得点（平均値±標準偏差：5.20 ± 0.83~0.90）であったにも関わらず，充足度では夫婦間で有意差が認められた（$p<0.05$）ことである．有意差が確認された項目は，妻が「余暇や娯楽の時間」「家事をする時間」「家事や育児などに対する配偶者の協力」「結婚生活に対する満足感」「配偶者からの精神的サポート」の5項目，夫が「子どもと過ごす時間」「性生活に対する満足感」の2項目であり，その内容は夫婦間で一致していなかった．夫の充足度が有意に低い「子どもと過ごす時間」については，妻と比べると家事・育児への従事時間が少ないことが影響していると考えられる．但し，共働き世帯の夫が非共働き世帯の夫よりもペイドワーク時間が短いにも関わらず，アンペイドワーク時間も短い（平田，2007）ことが指摘されており，充足度が低い要因については，詳細な検討が必要である．「性生活に対する満足感」は男女の性差によるものと考えられた。「家事をする時間」と「家事や育児などに対する配偶者の協力」については，夫婦間で平均値に0.5ポイント以上の開きがある．この2項目に関していえば，妻がこれらの項目を一手に引き受けているがゆえに余裕がなくなり充足度が低い評価となるが，夫はそのおかげで，妻ほど充足度が低い評価にならずに済んでいる可能性があるのではないだろうか．この結果も妻の家事・育児についての過重負担を表すものと捉えられた．このように，夫婦それぞれの充足度の違いに着目し，その理由を考え，夫婦が双方または相互に及ぼす影響を踏まえながら，互いの充足度を高められるような支援が重要と考

えられる.

次に，家族機能重要度に関しては，総得点と「家族とサブシステムとの関係」「家族と社会との関係」において妻の得点が有意に高かった．妻の就業率が低い（約 30%）対象群を分析した先行研究（Hohashi et al, 2011）においては，妻の総得点と「家族とサブシステムとの関係」のみが有意に高かった．しかし，今回は共働き夫婦を対象としたことで，「家族と社会との関係」においても有意差が認められたと推測される．共働き家庭にとって，子どもが保育園を休むことや自分が仕事を休むことはできるだけ回避したい．子どもが病気時の夫婦の育児分担は，「主に妻」が 58.1%，「妻の方が多い」が 27.6%，「夫の方が多い」は僅か 2.3% で，妻に大きく偏っており（久保，2012），特に，妻が有意に重要視していたのは，妻の方が夫よりも圧倒的に「家族と社会との関係」から影響を受ける立場にあるためと推察された．「家族とサブシステムとの関係」においては，身内・友人・知人への相談とそれらからの精神的サポートに対する重要度が高かった．ソーシャルサポートが母親の育児負担感を低減する（荒牧ら，2008；高橋ら，2008）との報告は多く，妻にとっての重要度の高さが理解できる．

夫は「家族と家族員との関係」の得点については妻とほぼ同様の得点を示したが，他の 2 分野の重要度得点は有意に低かった．実生活における夫の関与の低さがこのような結果に繋がったと思われるが，中川（2010）は，社会的に構築された妻の家庭責任意識が直接的に，さらに妻の家事育児の遂行を通して間接的にも夫の家事・育児を強く規定していることを報告している．妻の強い家庭役割意識によって夫の育児・家事参加が制約され，妻には結果として就労と家庭の二重負担が生じている（中川，2011）との見解もある．妻は家庭内に留まらない社会と家族の関係に対しても関心が高く，夫よりも家族機能を重要視している．そのことが結果的に妻自身の負担を増大させ，夫の関心を低下させることがないように，妻の負担軽減と，夫の家事・育児への関心を高めるような看護介入を検討する必要がある．

2．夫婦それぞれに対する家族看護介入の優先度が高い内容

夫婦に共通して家族看護介入の優先度が高い内容は，「子どもと過ごす時間」「子どもに関する心配事」の 2 項目であった．共働き家庭では仕事と家事・育児の両立に苦労している家庭が多く，子どものためにゆっくりと時間をかけることが重要だと感じつつも，それができないことにストレスを感じている親が多いのではないだろうか．子どもと過ごす時間が少ないことは子どもの状態を十分に把握することを難しくさせ，子どもに対する心配事を抱えやすくする．夫婦で子どもに関わる時間を確保するために，労働時間の短縮や残業の縮小，子育てしやすい働き方の選択ができるような職場環境の整備が急務である．上記 2 項目以外に妻への看護介入の優先度が高い項目として，「家事をする時間」「配偶者と過ごす時間」「家事や育児などに対する配偶者の協力」の 3 項目が挙げられた．育児中の母親のストレス状態を，心拍や副交感神経の変化から測定し，夫が妻の育児相談に真剣に耳を傾けているだけで，妻のリラックス状態が安定して続く（NHK，2016）ことや，夫からの精神的サポートが少ないほど妻の育児不安が高い（牧野，1982；神庭ら，2005）ことが報告されており，妻にとって夫と過ごす時間のなかでコミュニケーションをはかり，共感を得ることの重要性が示唆されている．「家事をする時間」についての夫の回答は，充足度は低いものの重要度は高くなかった．これは現在の自分

の家事時間に対して理想と現実にギャップはあるが，それをさほど重要視していないことを表している．では，重要視しない理由はなぜか．今回の調査対象は共働き家庭ではあるが，妻の正規雇用率が約60%であり，40%の家庭は性別役割分業に近い家事分担の傾向にあったのかもしれない．あるいは，フルタイム就労の妻が家事に対して重要度を高く認識し，一手に引き受けるかたちで家事が何とか機能しているために，夫は自分が家事時間を確保することの重要性に気づきにくくなっている可能性がある．このことは夫が「家事や育児などに対する配偶者の協力」に関して25項目中2番目という高い重要度を示す一方で，充足度が低くないこととも関係している．すなわち，夫は家事・育児については，配偶者の協力が欠かせないと言う認識を持っているが，妻に頼ることで積極的に関与していない，または低い分，妻からの夫に対しての協力が不足していると言う認識には至っていないと解釈することができるのではないだろうか．

以上のことから，家族看護介入の必要性が高いのは夫よりも妻の方であり，特に時間的余裕と夫からの家事・育児への協力に関して，看護介入の必要性が高いことが示唆された．加えて，支援の際には，妻への直接的な支援だけでなく，夫の認知や行動変容を促す等の介入を通じて妻の支援に繋がるものも少なくないと考えられる．夫婦間の家族機能評価には違いがあり，夫婦それぞれの家族機能得点が示す意味を丁寧に分析し，支援策を考慮することが重要である．今回，夫婦ともに，重要度得点，充足度得点の両方が低かった項目は「家事や育児などに対する友人・知人の協力」であった．本研究の対象者は，地方都市に在住しており，核家族が約90%を占めているが，86.5%が育児への援助が「ある」と回答しており，その内訳は祖父母が約9割を占めていた．友人・知人からの協力を要請しなくても，近隣に祖父母世帯が居住し必要に応じて支援を受けられる環境にある母集団の特性が影響したものと考えられる．

ここまで，夫婦それぞれの家族機能評価に着目して考察した．同じ屋根の下で生活していても，家族機能評価の結果は夫婦間でこれほどまでに違っている．法橋（2005，2008a）は，家族看護学が家族システムユニットを対象とするにも関わらず，情報収集の対象者が個人単位となり，中でもその対象が妻（母親）であることが多く「妻たちの家族看護学」問題として提示し，家族システムユニットの家族機能得点を明らかにする重要性を指摘している．今回は，乳幼児を育てている共働き家庭の，夫からみた家族機能評価と妻からみた家族機能評価の相違点・共通点に着目し，その特徴を明らかにした．家族システムユニットとしての家族機能評価には至っていないが，夫婦それぞれの特徴に着目することで，家族看護介入への示唆が得られた．

3．本研究の限界と今後の課題

FFFS日本語版Ⅰは乳幼児を育児中の共働き夫婦を属性として尺度開発が行われており，本研究の調査対象者と同様の属性であることから，今回は開発時の25項目3分野の基準に基づいて分析を行った．地方都市における調査結果の記述であり，現代の乳幼児を育てている共働き家庭の家族機能の実態として一般化することはできない．加えて，夫婦別の特徴は見いだせたものの，家族看護介入のためには，計量的な研究だけでは見出せない夫婦間の関係性や相互作用等に関わる個別性への着目が必要である．また，尺度開発時の基準に基づく分析は，先行研究との比較が可能になるというメリットはあったが，開発から16年が経過しており，今後は今回の対象群における，FFFS日本語版

Ⅰの因子構造の確認とそれに基づいた，各属性との関連等について，詳細な分析が必要と考える．

Ⅴ　結論

1．乳幼児を育てている共働き家庭の家族機能の評価は，夫よりも妻の方が家族機能の重要性に対する認識が高く，家族機能充足度が低い状態であった．
2．夫婦に共通する家族看護介入の優先度が高い項目は，「子どもと過ごす時間」と「子どもに関する心配事」であった．
3．夫よりも妻に対する家族看護介入の必要性が高く，時間的余裕と夫からの家事・育児への協力に関して支援の必要性が高いことが示唆された．

謝辞

B市，C市の保育関係部署の皆様，調査対象者の皆様のご協力に深謝致します．またFFFS日本語版Ⅰに関する資料提供をいただいた開発者の神戸大学大学院保健学研究科教授　法橋尚宏先生に厚く御礼申し上げます．

本研究は2015～2017年度日本学術振興会科学研究費助成事業若手研究B（課題番号15K20754）の助成を受けて実施した．

文献

青木聡子(2009)．幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因：育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して，発達心理学研究，20(4)，382-292.

荒牧美佐子，無藤隆（2008）．育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に，発達心理学研究，19(2)，87-97.

平田道憲（2007）．共働き世帯と非共働き世帯の夫婦のワーク時間の時系列変化－家族類型からみた分析－，広島大学大学院教育学研究科紀要第二部，第56号，297-302.

法橋尚宏（2005）．家族エコロジカルモデルにもとづいた家族機能度の量的研究：FFFS日本語版Ⅰによる家族機能研究の現状と課題，家族看護学研究，10(3), 105-107.

法橋尚宏，本田順子（2010）．家族機能論，法橋尚宏（編），新しい家族看護学－理論・実践・研究－，38-45，メジカルフレンド社，東京.

法橋尚宏，本田順子，平谷優子，Feetham, S. L.（2008a）．家族機能のアセスメント法-FFFS日本語版1の手引き，EDITEX，東京.

法橋尚宏，本田順子，平谷優子（2008b）．妊娠先行型結婚をした養育気家族の家族機能，保健の科学，50(1)，38-41.

Hohashi, N., & Honda, J. (2011). Family functioning of child-rearing Japanese families on family-accompanied work assignments in Hong Kong, *Journal of Family Nursing*, 17(4), 485-510.

法橋尚宏，前田美穂，杉下知子（2000）．FFFS（Feetham家族機能調査）日本語版Ⅰの開発とその有効性の検討，家族看護学研究，(6)1，2-10.

Honda, J., & Hohashi, N. (2015). Discrepancies between couple' perceptions of family functioning in child - rearing Japanese families, *Nursing & Health Sciences*, 17, 57-63.

神庭純子，藤生君江，飯田澄美子（2005）．養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究（第1報）－家族機能との関連性について－，家族看護学研究，10(3)，68-77.

久保桂子（2012）．共働き夫婦における親族の育児援助と夫の育児参加－子どもの病気時

の育児を中心にー，日本家政学会誌，63(7)，369-378.

牧野カツコ（1982）．乳幼児をもつ母親の生活と育児不安，家庭教育研究所紀要，3，34-56.

内閣府（2015）．共働き等世帯数の推移　平成26年度男女共同参画社会の形成の状況，男女共同参画白書，2016年9月10日引用 http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-08.html.

中川まり（2010）．子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加，家族社会学研究，22，201-212.

中川まり（2011）．共働き男性における性別役割分業意識と妻の正社員就労が育児・家事参加に与える関連性，お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」公募研究成果論文集2010年度，23-31.

中村由美子（2003）．養育期にある家族の家族機能モデルの構築，日本小児看護学会誌，12(2)，45-52.

NHK（2016）．NHKスペシャルーママたちが非常事態．最新科学で迫るニッポンの子育てー，2016年8月17日引用 http://www.nhk.or.jp/special/mama/qa.html.

Roberts, C. S., & Feetham, S. L. (1982). Assessing family functioning across three areas of relationships. *Nursing Research*, 31(4), 231-235.

総務省（2012）．平成23年社会生活基本調査生活時間に関する結果要約，2016年9月2日引用 http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf.

高橋道子，園田陽子（2008）．育児への肯定的感情にソーシャル・サポートが与える影響：東京・沖縄における調査，東京学芸大学紀要総合教育科学系，59，171-181.